



Be Creative !



戦後 80 周年 修学旅行がやってくる！



君たちならではの修学旅行の創造を！

修学旅行には思い出がいっぱいだ。

今ではホテルでの宿泊が普通で、コロナ禍以来、学級活動もオンラインで行う。かつては、大きな和室のある旅館に泊まり、必ず顔を見合わせての学級活動が毎晩行われた。広い和室に入るや否や、生徒たちは「先生、一回でいいから寝っ転がって話し合いがしたい。」と叫ぶ。修学旅行でしかできないと思い、私は生徒たちに交換条件を出す。「じゃあ、3 日目の広島(当時は、中国地方への修学旅行であった。)での学級別フィールドワークでみんなが頑張ったら、そうしよう。」

生徒たちは頑張った。きっと、こんな交換条件がなくとも。被爆を経験した高齢者が住まう特別老人ホーム「むつみ園」を訪問し、ゲームをし、歌と踊りを披露し、高齢者の皆さんの話に耳を傾けた。二度と聞くことのできない貴重な話だったと思う。生徒たちも「この次」がある経験だとはだれもが思わなかった。それゆえにかけがえない時間であることを全ての生徒が感じ取った。その日の夜は、旅館の和室の天井を見ながら、学級の活動を行った。お互いの顔が見えない分、生徒たちの声は素直であった。寝っ転がりながら、私たちは、それぞれの今日の体験を、みんなの体験へと昇華させていったのである。

四半世紀も前の思い出ながら、記憶は極めて鮮明だ。この時、私のクラスのバスガイドさんだけがひと際、年齢が高く、生徒からは総スカンをくらうことになる。「私が気に入らないのね。私、負けませんからね。」さすが、ベテラン！次から次へと彼女が繰り出す面白いゲームに生徒たちは夢中になっていく。知らぬ間に彼女の手中に落ちるのである。最終日には「担任になってほしい。」と懇願するほどに。「私はどうなるんだ?!」「トレード、トレード」大笑いである。これもまた、忘れられぬ。

さあ、今年の沖縄修学旅行が始まる。2002 年度から本格的に始まった沖縄修学旅行であるが、一年として同じ修学旅行であったためではない。その有り様は、その年度の生徒たち、先生方の持ち味により、常に独創的であった。

テーマは変わらない。「生徒たちに直球を！」—かつて私が生活指導部長として修学旅行の在り方を考えていた時のテーマであり、これは私の中で変わることはない。観光地としての沖縄であれば、どうぞ、将来お金を貯めて、自分で出かけてほしい。修学旅行でしか学べない、君たちでなければ体験できない、そうした修学旅行の創造を！—私たちの願いはこれだけである。
(2025 年度修学旅行しおり巻頭言より)

今年度の修学旅行が 12 月 7 日から始まる。私にとっても通算 25 回を超える引率回数となる。「修学旅行の女王」と言えば、間違いなく本校では 2 年 C 組担任の加賀先生と私である。加賀先生は本校にて長く続いた広島への修学旅行を始め、修学旅行の試行期間に実施された北海道・沖縄・九州、この全てのコースを制覇している。私は、自分自身が経験をした生活指導部長の役職をきっかけに、2002 年度からこの間、修学旅行を引率しなかったのは 1 回のみだと記憶する。担任として出かけた 4 回ほどの回数も加えると、引率の回数としてはけっこうすばらしい。

一度として同じ修学旅行はなかった。それぞれにおいて学年の個性があふれていた。コロナ禍、多くの学校で修学旅行の中止、簡略化がなされる中、その一つの対策として、急遽、沖縄から福岡・長崎に修学旅行の行き先を変える。我慢を強いる学校生活が続く中、せめて、生徒たちが心豊かになるひと時をと考えた当時の学年主任の石崎先生は 3 日目の夕食に洋食のフルコースを用意した。自分たちの前に何本も並ぶフォークとナイフに生徒たち

は目を丸くする。料理が運ばれるたびに、生徒たちは石崎先生を見た。次はどうすればよいのか、先生の所作に生徒たちは学んだのである。何ともほっこりとした、忘れられない夜を私たちは共に過ごしたのである。

先ほどの修学旅行の巻頭言に戻ろう。バスガイドさんに関わる話題には、もう一つ、忘れられないエピソードがある。「自分たちの担任になってほしい。」とガイドさんに懇願する生徒。私の肩をたたき、「大丈夫だ。バスガイドとして十分に通用する。」とトレードを促す生徒に交じり、「俺はいやだよ。」と I 君が叫んだのだ。「先生がいなくなったら、『羅生門』のあの老婆の声が聞けなくなるんだぞ。」「羅生門」は彼らが 1 年次に学んだ小説である。「I 君、本気で言ってる？」と問う私に、「本気ですよ！」と彼は言ったのである。何よりの誉め言葉として、私の記憶に残る生徒の言葉である。その I 君も 40 歳をはるかに超えた。君の言葉は今も私を励ましている。

今年の修学旅行ではどんなエピソードが生まれるのか。楽しみにして、私も旅の準備を始めようと思う。

この冬、私が読んでみようと思う本 3 冊



1.『生きることでなぜ、たましいの傷が癒されるのか』大竹裕子

想像を絶する苦しみや悲しさから立ち直るためにはどうすればいいのか。文化や歴史が異なると、その癒やし方も違うようだ。著者はアフリカのルワンダに住み、1990年代のジェノサイド(集団殺害)や紛争を生き延びた人々の姿を描いた。ルワンダには欧米的な個人主義を前提とするトラウマという概念はなく、むしろ、祈りや集会などを通じて再び共同体とつながり、生きる力を取り戻していく。助けたり、助けられたりしながら共に生き、痛みから立ち直っていく姿を追った。現地の言葉「グスニカ・イミンシ」一歩ずつ、懸命に生きることを指す言葉だ。

2.『あなたが走ったことないような坂道』有賀未来

著者は2007年生まれの高校3年生だ。この作品は新潮新人賞に輝いた。主人公の女子高生は香港生まれ。国籍は中国だが、幼い時より日本で暮らし、中国語は話せず、韩国人の両親とも血のつながりが無い。学校では孤立し、女友達だけが心の支え。国籍・言語・家族・性に戸惑う彼女の揺らぎに心が痛む。生きづらさを抱え悩む若い世代が「違いの壁」を前に自らの存在意義を問う。「意見の違いを対立や対決にすり替える現代に、迷いやためらいこそが貴重だと教えてくれる作品」との書評に心誘われ、読んでみたいと思った作品である。

3.『ありす、宇宙(どこ)までも』売野機子

最後はアニメ。「マンガ大賞2025」を今春に受賞した作品。主人公は中学生の朝日田ありす。日本語と英語の2言語を修得するよう、幼いころからバイリンガル教育を受けていたが、両親を亡くし、どちらの言語も十分に話せない「セミリンガル」になってしまう。そんなありすが、算数オリンピックなどで数々の優勝歴を誇る孤高の天才・犬星類と出会う。「俺が君を賢くする」と寄り添う犬星に導かれ、日本人の女性として初めての宇宙飛行士船長になる夢に挑む。まだ、雑誌に連載中の作品で、単行本としては5巻まで刊行されている。

作品に込められている思いは「夢は遠ければ遠いほど熱くなる」ということ。「悩みや苦しみをばねに生きる人間の強さを爽快に描きたい」という思いも作者は持つ。作者は読者につたえたいこととして、以下のことを挙げる。

「この世は生きるに足る、美しい世界だと伝えたい。悲観的なムードの中でも、自分の力で頑張りたいと燃える人は世の中にいる。そんな人たちに『がんばろうや』と励ます作品が掛けたら、うれしい。2人の熱い友情、永遠の魂を描くので、彼らの人生に期待してほしい。」



全校の皆さん、風邪に気をつけてお過ごしください。